

## 演題 2 1

### コミュニケーション能力向上への試み「日本語表現法」について

○香取尚美<sup>1)</sup>，木村泰<sup>1)</sup>，青崎史代<sup>2)</sup>，山藤賢<sup>1)</sup>

(<sup>1)</sup> 昭和医療技術専門学校 (<sup>2)</sup> 考学舎)

【はじめに】本校では、常に医療人としての思いやりのある心を育む教育方針を貫き、これまでも学生間の心の絆を高める教育内容の一端を報告してきた。昨今では、臨地実習先や、就職後の現場において、より一層コミュニケーション能力の必要性が語られ、今後の臨床検査技師に決して欠かすことの出来ない能力の一つと考える。このたび、本校の第一学年生において「日本語表現法」というカリキュラムを導入し、新たな試みを行っているので、その教育効果について報告する。

【目的】この講座の目的を、「自分の意図を正確に表現し、的確な文章を書くこと。また適切な表現能力を身に着けることを目標とし、実践を通して身に着ける。」と位置づけた。その内容と学生アンケートを通して見えてくる効果や課題を検討する。

【対象と方法】第一学年において、1.5時間×2(3時間)を4回(計8コマ)の講義を行った。講義は国語教育を専門にしている外部企業の講師に依頼し、入念な打ち合わせの元、実際の社会人向けのセミナーで行っているような内容を学生用にアレンジした。内容的にはワークショップ形式を中心に行い、アイスブレイクに始まり、複数人での起承転結作文作成、積極的傾聴のロールプレイ、4コマ漫画作文、ことわざ作文プレゼンテーションなど、多項目にわたって実施した。

【結果】入学後間もない学生が、コミュニケーションゲームなどを通じて、学生同士の親睦を深めると共に、受容し合う関係性が作られ、自然と笑顔がこぼれる場が作れていた。学生のアンケートでは、コミュニケーションゲームや、作文作成、プレゼンテーションなど、いくつかの項目ごとに、楽しかった、難しかったなどの採点を1～5点(最高5点)で採点した。結果として全体的に高い点数がつけられていたが、平均点で3.3～4.3の幅があり、アンケート項目ごとにおいて差が見受けられた。

【考察】講座の目的を達成するためには、「人と積極的に関わろうとすること」「他者を受け入れる状態になること」「自分の伝えたい内容を効果的に伝えること」の三つが必要と考え、口頭、文字による表現の両方での指導を行った。具体的には、コミュニケーション能力の中でも特に重要な「聴く技術」から始め、昨今の学生の非常に弱い部分である「論理的文章構成」を学ぶための色々なパターンでの作文作成や、自分の意見を効果的に伝える「プレゼンテーション」について考え実践した。この講座にてこだわったことの一つは、社会人に通用する内容の講座を学生にそのまま適応するというものだった。そのため、学生用のアレンジはしつつも、講師も内容もプロフェッショナルにこだわった。アンケート結果からは、行った項目によって得意、不得意も見られ、今後の課題も考えられる。本校では学生を「社会に出てから即戦力として活躍できる臨床検査技師」に育てあげたいという理念があるが、学内教育だけでは不十分と考える。この講座もその後の6ヶ月間という臨地実習あつての前提であり、卒業後、社会に出てからまでの流れの一環ととらえ、本校独自のストーリーを大切にしている。臨床検査技師としての知識・技術教育は当然のこと、それだけではなく、これからの社会においてもコミュニケーション能力は大切な要素であり、来年度以降も、さらなる教育効果の向上に努めたいと考えている。